4 ブッダの沈黙

仏教の開祖ゴータマ・ブッダが活躍した紀元前400年前後は哲学議論が沸騰した時代でした。大国の形成期に当たり、王族の政治・経済力が伸張し、知識階級の力が求められ、しかも、知識がバラモン階級の独占から解放されようとしていました。この時代には、どうしたら「輪廻と業」に起因する現世の苦しみから解放されるかが一般の人々にとっても切実な問題でした。生まれに基づく階級制度の枠を離れて、男女を問わず普遍的な「人間」のための救済の道が求められ、いわゆる自由思想家「沙門」たちが輩出し、既成理論に囚われない多様な思想と実践法を産み出しました。仏教やジャイナ教もその一つです。各種宗教や哲学学派の基礎が築かれ、アテーナイにおけるソフィストの時代に比べられる点があります。当時最大の「形而上学的」問題は「世界に果てはあるか」、「世界に始まりと終わりはあるか」、「死後の存在はあるか」、「精神主体と肉体は同一か」という４つに集約されますが、ゴータマ・ブッダは現世における人間の苦しみの解消こそが緊急課題であるという立場から、こうした問いに答えるべきではないという姿勢をとり、彼の救済の哲学を貫徹したようです。有名な「毒矢の喩え」とよばれる仏典の一節では、このような問いは、毒矢に射られた瀕死の人間が矢を射た者の素性や性質、弓の種類、矢や毒の部材・成分を問うように愚かなことであると説かれています。「言葉による決闘」が学者の本領であった時代に「沈黙」をもって勝利したとすれば、奇跡的成功と言えるでしょう。

5 無我と縁起

ゴータマ・ブッダは「行為」の連鎖がもたらす輪廻という苦からの解放を探求し、輪廻主体の完全消滅である「涅槃（ねはん）」（ニルヴァーナ）への道を見出しました。彼こそは王族出身ながら「不死への門」を開いた「真のバラモン」と言えます。仏教は恒常不変のアートマンを否定し（無我）、現象界に存在する個人を、諸条件に依存して（縁起（えんぎ））絶えず変化生成する五要素に分け、その中の認識作用（識（しき））に輪廻の中核的役割を担わせました。「識」を巡る考察は仏教内部で展開し、唯識学派の「アーラヤ識」説などを生むに至ります。

6 四苦

「四苦八苦」は、輪廻の中にある現世の存在は苦であるという真理（「苦諦（くたい）」）を基に、主要な「苦」を分類提示した仏教用語でした。「生老病死」の四苦の中、「生苦（しょうく）」はブラーフマナ以来の天界での「再死」を捉え直したもので、神的存在である資格を失って地上に再生することを意味します。死後天界の住人となることが前提とされていた時代の精神を引きずっているため、地上への再生は否定的に捉えられています。仏典の「天人五衰（てんにんごすい）」は天界での寿命が尽きる時に現れる５種の兆候をいうもので、ここにも古い観念の名残が見られます。人の寿命は本来100歳で、それは天界の最下層に棲む者にとっての一昼夜とされていました。仏典はこれを半分の50年として定式化しましたが、「人間五十年下天（げてん）の中に比ぶれば…」はこれに由来します。

7 これからの課題

「輪廻」や「業」は、今日では漠然と「生まれ変わり」や、「現生のありかたを規定している（前世での）罪深さ、人の原罪」に近い意味で用いられますが、もとは厳密な専門用語です。「輪廻」は、生命が死によって終わらず来生があるというような希望に満ちた観念ではありません。その理由は概念成立の過程に隠されています。「縁起」や「無我」ももとは厳密な術語でした。このように、インドの思想や仏教に現れる概念は多く歴史的所産です。それ故にこそ、成立史を厳密に辿ることによって理詰めの議論の積み重ねを確認することができ、その過程で普遍的理性の営みと悩みとが見えてくるのです。

ヴェーダの祭式理論から仏教へと通じる道を辿ることができるようになったのはつい最近のことです。細部の検証はこれからです。このような研究を可能にしたのは、主として、ヴェーダ文献の中身が理解できるようになったからです。ヴェーダ語は「インド・ヨーロッパ（印欧）語族」に属する古インドアーリヤ語の古い段階ですが、『リグヴェーダ』やブラーフマナを含むヴェーダ文献は、ヨーロッパ諸語をはじめとする同語族の資料の中では格段に古く、言語研究に重要です。この観点から、「印欧語比較言語学」の分野で、ヴェーダ文献の言語に関する精密な研究が積み重ねられてきました。文法の各分野の研究、語源・造語法・語彙史などに亘る単語の研究、韻律研究などの成果が文献の正確な理解の基礎となります。そうした地道な方法と研究の積み重ねが、古い祭

式文献の中身を学問的に吟味することを可能にしました。上に一端を示したように、仏教や正統諸学派の思想をその前史から検証することによって、新たな歴史的俯瞰(ふかん)が可能となります。細部の緻密な検証を軸に築かれてきた仏教研究も、新たな観点から問題の筋道を追って解きほぐし、検証し直すべき段階に来ています。

ヴェーダ研究をはじめとするインド文献学はイランのゾロアスター教の原典研究と相互に補完しあう関係にあり、その方面の理解の深化も今後の課題です。印欧語族の拡大を巡る歴史研究、宗教学や人類学・社会学的研究、考古学などの諸分野に、文献に基づく信頼できる資料を提供する意味でも重要です。学問研究の諸分野が協力して人類史と普遍的理性の解明に貢献すべき時代を迎えた中で、こうした厳密な文献学的方法による研究は一層重要な役割を果たすことになるでしょう。

（後藤 敏文）

4．「問いかけ」と「知ること」

Points

1 知（ること）の探究
2 問いかけ（ること）
3 哲学のテクスト

西洋の哲学は、古代ギリシアにおける発端から、「知を愛すること」だと称し、また称されてきました。わかりやすい定義だと思うかもしれません。しかし、「知」とは何か、「愛する」とはどういうことなのかと問い始めると、答えが簡単ではないことにすぐに気づかされます。そうした問いかけを最も大切にするのが哲学なのですが、ここではその特徴を、「哲学とは何か」という、哲学にとっての初発の問いに立ち返って考えてみたいと思います。それがとりもなおさず、哲学がどのような営みなのか、あるいは、哲学はどのようにして思想を読み解いていくものなのか、その手がかりを考えていくことになるからです。